

1面から続く

脳性まひで手足が不自由だ。阪神・淡路大震災時は、障害者の自立生活を進める民間団体「メイ・ンストリーム協会」(西宮市) 副代表。同市内の自宅アパート、職場ともに全壊した。

救出されたのは、地震の約2時間後。近くに住んでいた大家さんが「足の不自由な兄ちゃんが埋まってる」と周囲に知らせてくれた。隣の部屋の大学生は即死だった。僕は仮死状態で生まれ、その時も死にかけているけれど、震災を経験して「生き続けなアカン」と強く思うようになった。

震災後、協会の再建や障害者の支援活動に奔走。約2年間、仮設住宅で暮らした。

作業所などの施設や組織とつながりがある障害者には、災害時も支援が届く。届かないのは、日々の生活でつながりがない人。日常的に孤立しているから災害時も孤立する。重要なのは

日常と災害切り離さず

普段の生活。これは障害者に限った問題ではないと思う。

全国各地で講演し、NHKの障害者情報番組「バリバラ」のレギュラーを務める。災害時の要援護者支援について意見を求められることも多い。

災害時だけを切り離して考えるのではなく、どんなときでも支援を必要とする人に支援が届くことが大切。誰だって足の骨を折れば「要援護者」になる。

阪神・淡路大震災以降、災害のたびに同じ議論を繰り返しているように思う。

障害者総合相談支援センターにしのみやセンター長

インタビュー

1.17から

震災19年

4

玉木 幸則

たまき・ゆきのり 1968年、姫路市出身。日本福祉大学卒。メイ・ンストリーム協会副代表などを経て、2013年4月から現職。国の社会保障審議会障害者部会委員。西宮市在住。妻、長男、長女の4人家族。

それでも発信し、人と関係をつくり、街に出て行くしかない。言い続け、思い続けることで耳を傾けてくれる人がいる。

東日本大震災後、出演していたNHKの番組「きらっといきる」(バリバラ)の前身に届いた声は、被災地の障害者の厳しい状況を示していた。



東日本大震災後、出演していたNHKの番組「きらっといきる」(バリバラ)の前身に届いた声は、被災地の障害者の厳しい状況を示していた。

生きる権利を認め合って

「疎外する気持ち」は誰にでもある。僕にもある。「差別は駄目」と言うのではなく、自分に疎外する気持ちがあると自覚し、その上でどう認め合って生きていくかを考える。そこが重要だと思う。

「福祉」は施しではない。人が人として生きていくための環境整備であり、権利。その原点を見つめなければ、災害時に人の命を守ることもできない。

「地域社会で生きるとは」という根源的な問題につながる。

記事・磯辺康子
写真・斎藤雅志